PISA IN FOCUS 4

education policy education policy education policy education policy education policy education policy education policy

学校の規律は悪化したのか?

- クラスに規律上の問題がほとんどないと答えた生徒は、勉強ができないほどクラスに規律がないと答えた生徒に比べて、PISA調査の得点が高い。
- 2000年から2009年にかけて、クラスの規律はPISA調査に参加した多くの国で改善した。また、OECD加盟国の大多数の生徒が、秩序ある授業を受けている。
- 一般的に、クラスの規律が2000年から2009年にかけて改善した国々では、教師との関係も改善していると生徒が答えている。

クラスの雰囲気は生徒の成績に影響することがある。

規律の問題の多いクラスや学校は、学習の助けにはあまりならない。何故なら、教師は授業を始める前に、より多くの時間を秩序ある環境を作るために使わなければならないからである。クラスが騒がしく、荒れていると、授業に対する生徒の集中力ややる気を阻害することになる。PISA2009年調査の結果では、規律ある雰囲気と生徒の得点とに強い関連があることが示された。国語の授業がいつも妨害されると回答した生徒は、クラスでほとんど妨害がない、もしくはたまに妨害があると回答した生徒よりも成績が悪くなっている。

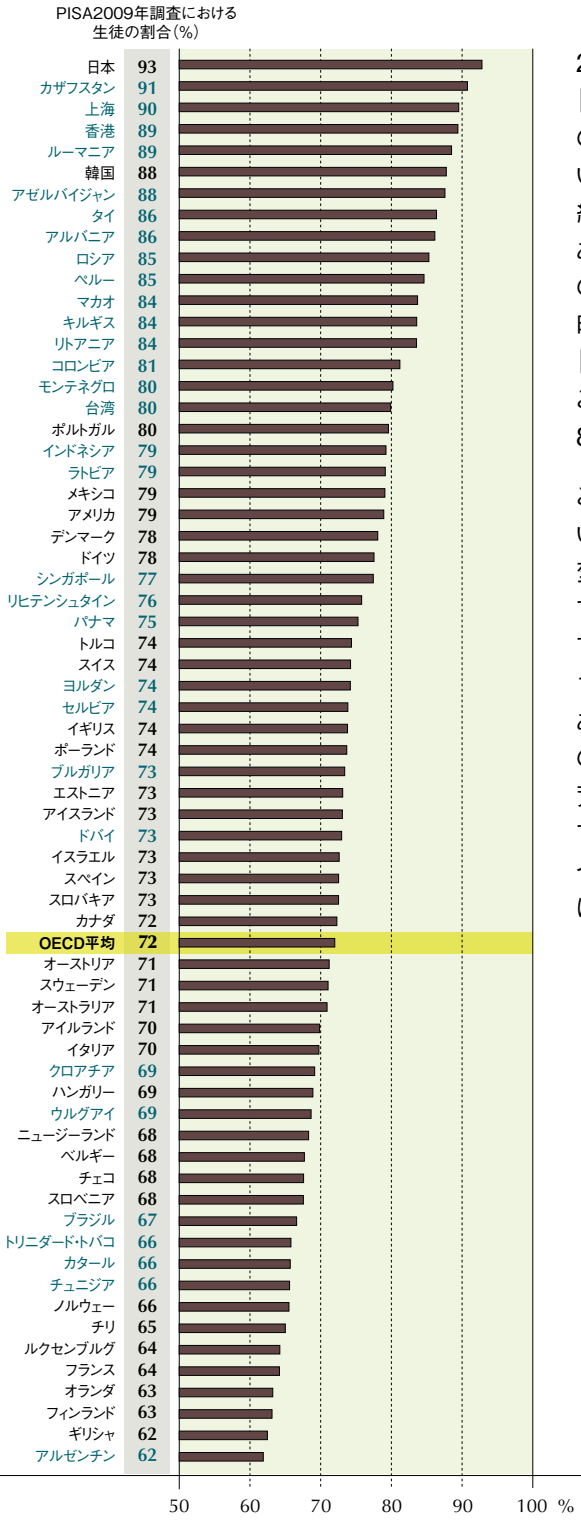
通説では、生徒集団は以前よりも規律を失っており、教師は授業を統制できなくなっている、とされている。しかし、この通説は間違っている。PISA2009年調査で集められたデータによれば、OECD加盟国の大多数の生徒は秩序ある授業を受けており、2000年から2009年にかけて学校の規律は悪化しておらず、実際はほとんどの国で改善している。

秩序ある授業が増える傾向にあり…

OECD加盟国の平均では、先生は生徒が静まるまで長い時間待つ必要がないと回答した生徒の割合は、6ポイント増えている(2000年の67%から2009年は73%まで上昇)。これに関して、好ましい状況にあると回答した生徒の割合が減少している国は、1つもない。比較可能なデータのある35か国中、25か国もの国々で、学校の規律ある雰囲気が向上しており、残りの13か国では変化が見られなかった。特に大きな改善(10ポイント以上)があったのは、ドイツ、イスラエル、イタリア、スペイン、スウェーデン、非OECD加盟国・地域のインドネシア、香港であった。

PISA IN FOCUS

クラスが落ち着いていると生徒が回答
「先生は、生徒が静まるまで長い時間待たなければならない」に
「ほとんどない」、「たまにある」と回答した生徒の割合



国・地域は、「先生は、生徒が静まるまで長い時間待たなければならない」に「ほとんどない」、「たまにある」と回答した生徒の割合の多い順に上から並べている。
出典: OECD, *PISA 2009 Database*, Figure IV.4.2.

2000年から2009年にかけて、国語の授業の間、「生徒は、勉強があまりよくできない」と答えた生徒の割合は、OECD加盟国では2ポイント下がっている。しかしながら、これに関して、かつて最も悪い結果であった国の中で、大きな改善を示したところもある。2000年調査において、イスラエルでは生徒の69%、ハンガリーでは生徒の74%が、国語の時間中、「生徒は、勉強があまりよくできない」に「ほとんどない」と回答していたが、2009年では、この割合がイスラエルでは77%、ハンガリーでは80%まで上昇している。

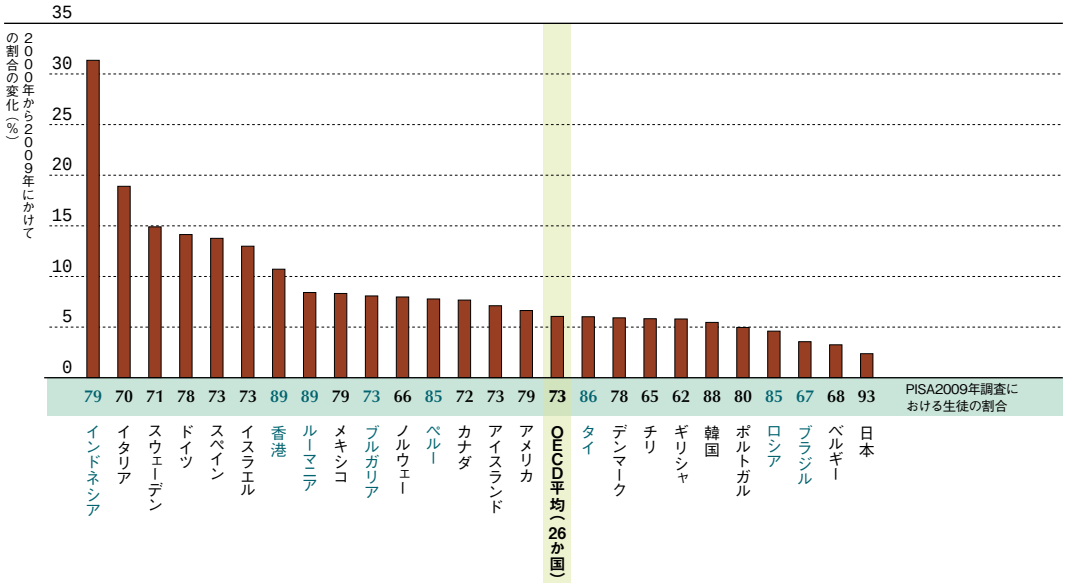
この期間、国語の「授業中は騒がしくて、荒れている」と回答したOECD加盟国の生徒の割合には変化がなかったが、この点に関して最も悪い結果であった国の中で――「授業中は騒がしくて、荒れている」に「ほとんどない」と回答した生徒が2人に1人しかいない――、大きな改善を示したところがある。2000年調査において、チリ、ギリシャ、イタリアの生徒の51%から54%が、「授業中は騒がしくて、荒れている」に「ほとんどない」と回答したが、2009年では、この割合がチリでは63%、ギリシャでは58%、イタリアでは68%まで上がり、授業時間がより平穏になったことが示されている。

…生徒と教師の関係は良くなっている。

生徒と教師の良い関係は、学習を促進する学級環境を確立する上で、極めて重要である。調査研究から、先生が真面目に扱ってくれていると感じた時、生徒はより学び、規律の問題も少なくなることがわかっている。2000年におけるPISA調査の結果では、生徒の大部分が教師による授業の質に、一般的に満足していることが示されていた。2009年では、生徒・教師関係の質はさらによくなっている。

2000年から2009年にかけてのクラスの規律の向上

「先生は、生徒が静まるまで長い時間待たなければならない」に「ほとんどない」、「たまにある」と回答した生徒の割合の変化

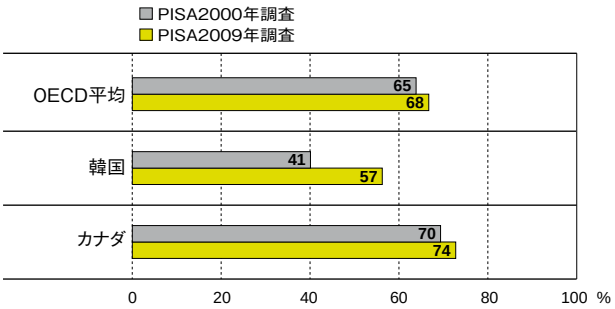


注: クラスの規律に関し、有意な改善が見られる国のみを表示（38か国中25か国）。国・地域は、「先生は、生徒が静まるまで長い時間待たなければならない」に「ほとんどない」、「たまにある」と回答した生徒の割合の多い順に左から並べている。

出典: OECD, *PISA 2009 Database*, Table V.5.12.

2000年から2009年にかけて、先生は「こちらが言うべきことをちゃんと聞いている」と回答した生徒の割合が、ドイツ、アイスランド、日本、韓国、非OECD加盟国のアルバニアで、10ポイント以上増加している。2000年において、ドイツ、日本、韓国は、そのように解答した生徒の割合が、比較可能なデータのあるOECD加盟26か国で最も少ない値を示していた。韓国では10人に6人の生徒が、ドイツと日本では半数の生徒が、先生は生徒の話を聞いていないと回答した。2009年では、これら3か国の生徒の過半数（57%から69%）が、先生は生徒の話を聞いていると回答した。

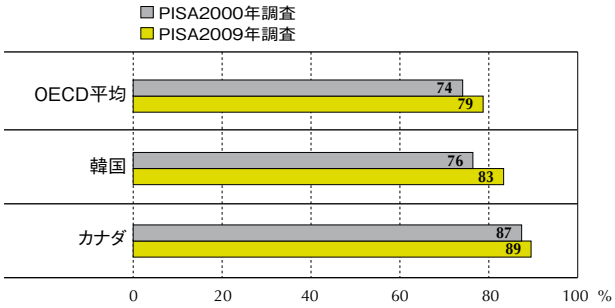
「たいていの先生は、こちらが言うべきことをちゃんと聞いている」に
「あてはまる」、「とてもよくあてはまる」と回答した生徒の割合



注: 2000年から2009年にかけての変化はすべて、統計的に有意。
出典: OECD, *PISA 2009 Database*, Tables V.5.11.

教師と生徒の良い関係は、教師が聞く耳を持つということに限らない。例えばドイツでは、「助けが必要なときは、先生が助けてくれる」と回答した生徒の割合が、2000年の59%から2009年では71%まで上昇した。2000年から2009年にかけて、「助けが必要なときは、先生が助けてくれる」回答した生徒の割合が、18のOECD加盟国、7つの非OECD加盟国・地域で上昇した。10のOECD加盟国、4つの非OECD加盟国・地域で、その割合は5ポイント以上も上がっている。ブラジルにおいてのみ、そのように答えた生徒の割合が減って、2000年の88%から2009年で78%になっている。

「助けが必要なときは、先生が助けてくれる」に
「あてはまる」、「とてもよくあてはまる」と回答した生徒の割合



注: 2000年から2009年にかけての変化はすべて、統計的に有意。
出典: OECD, *PISA 2009 Database*, Tables V.5.11.

結論: PISA調査では、以下のような考えを支持する証拠は得られていない。すなわち、学校の規律はますます大きな問題になっており、生徒は学校に対するやる気をますます失っていると。実際、2000年から2009年にかけて、学校の規律と教師・生徒関係は改善している。

本稿に関するお問い合わせ先
担当: Francesca Borgonovi (*Francesca.Borgonovi@oecd.org*) または Maciej Jakubowski (*Maciej.Jakubowski@oecd.org*)
出典: *PISA 2009 Results, Learning Trends: Changes in Student Performance Since 2000 (Volume V)* 及び *PISA 2009 Results, What Makes a School Successful? Resources, Policies and Practices (Volume IV)*.

参考サイト:
www.pisa.oecd.org

次回テーマ:
「生徒はどのようにして自らの社会経済的背景を克服しているか?」

本稿の翻訳は、日本のPISAナショナルセンターが担当しました。